

万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行
浄土真宗本願寺派 万行寺
住職 山崎信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾461-1
電話 0267-67-2460

2024(令和6)年

仏暦2567年

12月号

(第159号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



住職 法話

遠く宿縁を慶べ

正信念仏偈に学ぶ
顕大聖興世正意
明如来本誓応機
大聖興世の正意を顕し、
如来の本誓、機に應ずるこ
とを明かす。

「現代語訳」
釈尊が世に出られた本意
をあらわし、阿弥陀仏の本
願はわたしたちのためにた
てられたことを明らかにさ
れた。

前号の行で七高僧をあげま
した。その七高僧によって、
お釈迦さま(大聖)がこの
世に出られた(興世)本当の
目的(正意)は阿弥陀仏(如
来)の本願(本誓)を説いた
めであると示され、その本願
は私たちを救うため(応機)
の教えであることを明らかに
されたということです。
親鸞さまの著『教行信
証』の始めの総序に、
ここに愚禿釈の親鸞は、
よろこばしいことに、イン

ド・西域の聖典、中国・日
本の祖師方の解釈に、遇い
がたいのに今遇うことができ
き、聞きたいのにすでに
聞くことができた。そして
この真実の教・行・証
の法を心から信じ、如来の
恩徳の深いことを明らかに
知った。そこで、聞かせて
いただいたところをよろこ
び、得させていたただいたと
ころをたたえるのである。
と言われ本文に入っていくま
す。いただいたところを”よ
ろこびた”たえる”お心で、親
鸞さまは『教行信証』を
始められるのです。

だということなのです。
また、先ほどの『教行信
証』総序において、
ああ、この大いなる本願は、
いくたび生を重ねてもあえ
るものではなく、まことの
信心はどれだけ時を経て
得ることはできない。思い
がけずこの真実の行と真
実の信を得たなら、遠く過
去からの因縁をよろこべ。
と仰せになります。それは、
親鸞さまご自身のよろこびだ
けで終わるのではなく、この
私が念仏者としていまここ
にいるということは、決して偶
然などではなく、数限りない
願いやいのちをつなげてきた
結果なのです。それに、親鸞
さまは「遠く宿縁を慶べ」
と言われます。
私たち僧侶は、法話をして
仏さまの教えを皆さまにお
伝えしています。その心中
には、僧侶自らの信心を得た
よろこびが無いと何も伝わり
ません。人によるこびが伝わ
る法話に努めていきたいと思
います。

浄土真宗 新 仏事のイロハ

五、礼儀と作法

―お寺に親しむために―

「参拝の心得」

本堂に入ってからまず行うことは？

お寺に来られる時の、礼儀として知っておいていただきたいことは、本堂に入る時にはまず、入ったところで一礼（一揖）するということです。これは、本堂が仏さまの空間だからです。つまり仏さまの浄土を表しているのです。私たちの生活する世界は、自己中心的な価値観に満ちています。それに対して、仏さまの浄土は我欲を離れて、どこまでも分け隔てのない平等心に満ちた空間です。「本堂に入る」というのは、俗な空間から聖なる空間に足を踏み入れることなのです。いわば、本堂の入口の扉は聖と俗の境界（境目）と言えるので

しよう。その境界を超えることを自分自身に意識させる行為が一礼です。したがって、本堂に入ったならば、仏さまがおられるところであることを自覚しつつ、世俗の価値観を持ち込まないことが大切でしょう。

ところで、浄土真宗の本堂は、内陣と外陣に分かれているのが一般的です。巻障子の奥にある空間が内陣で、ここには、ご本尊の阿弥陀仏をはじめ、宗祖親鸞聖人や蓮如上人の御影が安置され、それらはさまざまな荘厳具でお飾りされています。この内陣へは、通常、僧侶でもお



勤めの時や仏さまのお給仕をする時以外には入りません。それに対して、外陣は、内陣にお飾りされた浄土の情景を、俗なる私たちが間近に感じながら、仏さまのお心に触れるために設けられた空間です。すなわち、仏法を聴聞する人なら誰でも、浄土を表す本堂内に入ることができ、そのための場まで設けられているのが浄土真宗の本堂なのです。仏さまでなくても入ることができると喜んでいただければと思います。

そのためにも、本堂に入る時には一礼すること。また、本堂から出る時や、山門の出入りの際も同様に、一礼しましょう。

「浄土真宗 新 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より



年忌法要表

1 周忌	2023 (令和 5) 年	23 回忌	2002 (平成14) 年
3 回忌	2022 (令和 4) 年	25 回忌	2000 (平成12) 年
7 回忌	2018 (平成30) 年	27 回忌	1998 (平成10) 年
13 回忌	2012 (平成24) 年	33 回忌	1992 (平成 4) 年
17 回忌	2008 (平成20) 年	50 回忌	1975 (昭和50) 年

編集後記

「仏事のイロハ」に触れた「一礼」の大切さは、どの世界にも通じるものがあります。日本人特有の良さでもあります。あの大谷翔平選手であっても一礼する姿が見受けられます。◆参詣が増える時期になります。まず、一礼に心がけてみましょう。◆今年一年有難うございました。良いお年をお迎えください。